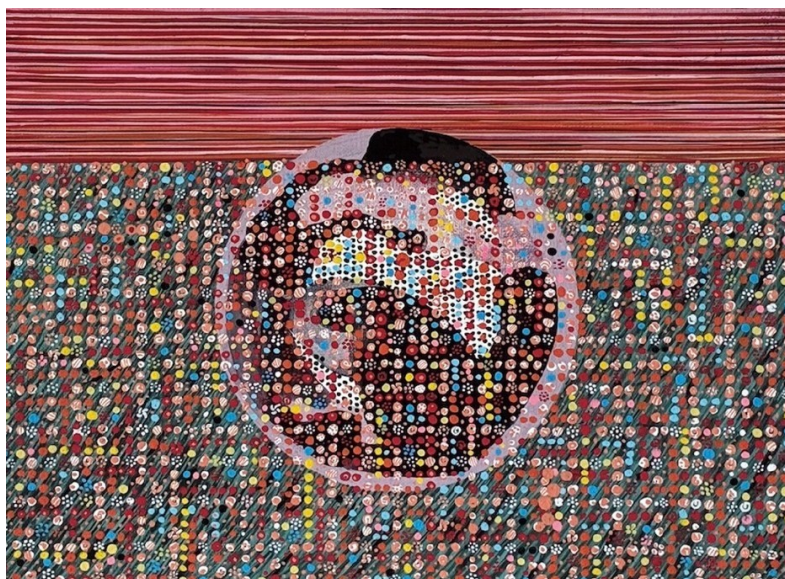


詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第30号（記念号）

2026年9月

目次

野田研一	まぼろしのように	2	岩間朱寿	春の殺人鬼	37
中村邦生	天は笑い、地は歎呼す	4		知ってるよ	38
千石英世	わが塔はそこに立つ	7	潮見蓮	虚構詩編2「沈黙の研究」	39
太田雅孝	緑の子	10	渡辺信二	蝶の教え	
伊達恵理	遠くで何かが	12		— K・Sさん(享年85歳)へ	45
岩永弘人	ウインドミル・レイン(風車通り)	14			
野澤里聡	純嶺 すみれ	17			
長尾早苗	女傑と呼ばれたあなたたちへ	18			
鈴木順三	遠い道	20			
伊東友乃	蜜柑	22			
	ミントガム	24			
	干し柿とわたし	25			
関根全宏	ざらついた掌	26			
高宮菜那	慎重すぎる	28			
茂木紗希	若草よ、笑え	30			
永松佑香	鳥籠のお嬢様	31			
山本麻衣	再会	32			
	願いごと	33			
	煙草	34			
	はっ恋	36			

表紙原画・鈴木順三

「成熟する月1」(表紙)

「成熟する月6」(裏表紙)

まぼろしのよう

野田研一

見知らぬ人が ビルの角を 曲がった
たまさかの 出来事 そのとき その人は
私の視界から 姿を消した わけだが

後を追って 自分もまた その角を曲がる ならば
一度見失った その人の姿を いま一度
取り返すことが できる わけだが

そんな確信が 私を立ち止まらせる ここに
わざわざ後を 追ったりせず とどまり
見失った場所を 断乎として動かない なぜ

明日がある と信じている それと
同じ程度に 歩み去った あの 後ろ姿が
いまも この角の先に あると 確信する
だから ほんとうは 見えていない のに

見えるはず そんな 確信が そのとき
まぼろしのように 聲音を たてて

あの角を曲がり 歩み去って しまう
私じゃない 確信が その聲音を
追いつける ただ それだけの こと

そして 私はまだ 同じ場所に いて
確信の行方 だけを確信して 動か ない
否 動け ない 残留する確信の そのゆえに

その人はさらに 次の角を曲がったかも 知れず
もはや 私の確信などは 絵空事 なのに
この確乎たる確信 のゆえに 私は動け ない

見ず知らずの 人に 私の心を
委ねる わけには いかない だから
その人があの角を 曲がった そのあと

さらに どちらに向かったのか いつか
引き返してくるのか どんな予測も
正しさとして 私に戻ってくる わけじゃない

天は笑い、地は歡呼す

中村邦生

もろびと来たれ、見よ、天は笑い、地は歡呼す。

執筆中は忘我夢中、不眠不休の絶食状態、ただし、一日平均五〇杯の珈琲で覺醒効果をはかる、珈琲の生涯飲用の総数およそ八〇、〇〇〇杯、仕事の区切りがつくと爆発的な大食い、大皿オードブル、スープ二種、牡蠣一〇〇個、ラム肉ロースト一四枚、かぶら添え小鴨一羽、ウズラ二羽、舌鰈一匹、洋梨など果物各種、高級ワイン四本、リキュール酒、これら一回分の料理。食べ物を口に運ぶことが優先の故、マナーはよろしからず、ナイフを口に直接突っ込む。見よ、強靱な筆力を支えたオノレ・ド・バルザックの死にももの狂いの暴飲暴食を。もろびと来たれ、見よ、天は笑い、地は歡呼す。

一杯のセリー酒を飲み、食事の終了、珈琲タイムの開始、カップ五〇種のコレクションから秘書に一客を選ばせ、それを選択した哲学的理由の講釈を要求、砂糖袋を嬉々として開封、カップに高々と角砂糖の山を積み上げ、とびきり濃い珈琲の注入、ゆつくり溶かして一気飲み、胃の中でのセリー酒との微妙な融合。見よ、深遠なる思想を準備した、セーレン・キルケゴールの珈琲嗜好の儀式を。

もろびと来たれ、見よ、天は笑い、地は歓呼す。

世界の名作一〇〇を選べ、それは不可能、私の著作はまだ五作だから、ジャーナリズムと文学の違いとは、前者が読むに値せず、後者は誰も読まないということ、私はあらゆるものに抵抗できる、誘惑は別として、一貫性とは想像力に欠けた人間の最後のよりどころ、樂觀主義者はドーナツを見るが、悲觀主義者はドーナツの穴を見る、見よ、後悔しないものは、自分の過ちだけ、と自らの言葉の自家中毒に陥ったオスカー・ワイルドの飽満の警句の数々を。

もろびと来たれ、見よ、天は笑い、地は歓呼す。

昼夜逆さまの生活、午後遅く三時ないしは四時の起床、喘息用のアヘンを使ったルグラ粉末による燻蒸治療、カフェオレ二杯とクロワッサン二個だけの一日の食事、ベッドで二つの枕で頭を支えて執筆、集中力を高めるためカフェインとアドレナリン錠剤の服用、就寝時にはバルビツール酸の睡眠導入剤ペロナルの使用。見よ、「ブレイキとアクセルを同時に踏んでいるような生活」と友人に言われた、マルセル・ブルーストの激越な引きこもりの著述の日々を。

もろびと来たれ、見よ、天は笑い、地は歓呼す。

故郷のプロイセンの田舎町に永住、遠出なし、海は近いが行かない、生まれつき病弱、生涯独身、地元の大学で哲学を四〇年余り講義、機械のごとく正確な日課をこなす、午前五時起床、紅茶を一、二杯、刻みタバコを二服だけ喫煙、思索、執筆、大学の授業、昼食、三時半ちょうどに散歩の開始、帰宅、仕事、

定刻の一〇時に就寝。見よ、規律正しい凡事精励こそ道德規範と美的法則の思想基盤であった、イマニユエル・カントの謹直な生活を。

もろびと来たれ、見よ、天は笑い、地は歡呼す。

口にするもの、卵、ココナツ、チーズなど、すべて白い食べ物のみ、叔父の遺産で買ったもの、全く同じ色とデザインのベルベット生地のスーツ七着、「ビロード紳士」として郊外の家からパリ中心部までの一〇キロの歩行、たまの帰路のタクシー、自宅を知られまいと二キロ手前で下車、死後自宅で発見された一〇〇本の同種の傘、環境としてただそこにある「家具の音楽」、同じモチーフを八四〇回繰り返し、演奏時間一〇八〇分の「ヴェクサシオン（嫌がらせ）」の音楽。見よ、生真面目と気まぐれ、勤勉と懶惰、反復と差異がまだら模様になった、凄絶な奇矯と異端の孤独にみちたエリック・サティの喜遊の世界を。

〈付記―参照文献は紙媒体の書籍のみ。各種あるが、とくに一書のみ記しておけば、メイソン・カリー著、金原瑞人・石田文子訳『天才たちの日課』（フィルムアート社）。

わが塔はそこに立つ

千石英世

窓をあけると窓いっぱい巨人の胴体が見える
川向うに立つ大阪瓦斯（株）のガスタンクだが
窓からは錆びた鉄蛇腹のウロコしかみえない
高さはタワーマンションなみ80メートル超

朝窓辺にさしこむうすい日影は
やがて西から東へ音もなく移動をはじめ
午後にはしつどを帯びてふかい影になり
夕べにはゼロメートル地帯の夕焼けの底
くらくひかる運河のそこにかえってゆく

あのガスタンクのなかにゴジラは立ったまま
寝てはったのです
大阪で立ったまま寝るのはウマだけではのうて
ゴジラも立ったまま寝て
立ったまま起きて
立ったままタンクのへりをまたぎこし歩きだし

立ったまま甲子園浜の浜辺に立ち　そこで
ひざまづいて顔を洗うて口をすすいで
しょんべんし　それから
大阪湾をじゃぶじゃぶ散歩しはるのです
明石海峡、朝霧君、舞子君、おはよう！　と

ゴジラ寝るときちゃんと横になつて寝はる！
との異論もあつたが
また

あんなかは
ガス充満やよつてそんなん寝てられへん！
そんなでも、そこがな、な、ゴジラなんや！
ほら、いまからちゃんと寝はる！
との意見交換もあるにはあつたが
ゴジラの出没地点は　ほんとうは
阪神間の工場地帯ではのうて
見知らぬ街の見知らぬ清潔オフィス街！
とのためいき

それは子どももひそかに承知のことで
だからこそ
窓辺に立つと
鉄蛇腹の巨人ガスタンクが

子どもらの町にゆらめきあらわれます

やはり

そうやって

町からきえていったガスタンクですから

いまでもその巨体は

川向うの

阪神工業地帯のおおきな空の下に

ふかい影となつてゆらゆら立ち上がります
なかから きれいな寝息が聞こえてきます

緑の子

太田雅孝

さかさまの木のかたわらに
あなたの胎盤を埋めなさい
そうすればあなたの失った命が
ふたたび木から生まれてくる

さかさまの木の地中から
さかさまの木の天空に向かって
さかさまに生まれる子が
さかさまに転じるとき

美しい子が産声をあげる
天と地をつないで
あなたの絶望をさかさまにしてくれる
恵みの雨を浴びて
緑の子は立派に育つ

さかさまの木が根を拡げ

清めの海をこしらえるとき

彼方から聞える楽の音の舟に乗り

嬉しそうに水平線を越えていくのだ

だからこの木のかたわらに

あなたの悲しみの子宮を眠らせなさい

遠くで何かが

伊達恵理

忘れてしまったかも 詩の書き方なんて
テレビの向こうの終わらない非道を罵倒し続けているうちに
気がつけば

まーけていんぐとびじねすが興行主の
やけに明るい笑顔と安全安心なセリフが氾濫する世界で
言葉がいんすたのオマケになって
売り込みと憂さ晴らしの道具になった世界で

そのむかし

「この世に商売ほど怖いものはねえ」
と言いつ返されて黙って海に消えたのは
船頭をおどかしに出た海坊主

歩みを止めれば切りつけるぞと

喧かまびすしい日々はカマイタチを飼ひ馴らす
眼には見えない秋の気配を
風の音にぞ感じ取ろうにも

夏の振りかざすギラつく日射しは どこまでも目と耳を眩ませて

けれど

もっと遠い昔

* 不吉な不安が秋の風とともに人々の心をかすめるような夕ぐれ
権勢を恣に 人も神も畏れず崩じた支配者の葬列を
山の上に 鬼有りて 大笠を着て 喪の儀を臨み視る

不意に

雪原に伏せた狼が頭を上げる

どこか遠くで

人知れず

その足裏を焦がしながら
空を森を山を行くもの
か細く甲高い叫び

この世界の この街中の この喧噪の中で

まだそれを聞き分ける耳があるならば

鬼に纏わせる大笠があるならば

カマイタチを屠る牙を持つものがあるならば

*は馬場あき子『鬼の研究』から

ウインドミル・レイン（風車通り）

岩永弘人

白黒の写真を見る限り
その道沿いには
二つの風車があつた
今では
通りの名前でしかない

ウインドミル・レイン
右は住宅地
左は一面のギンバイカ
昼下がり
そこを歩くと
いろんなものたちとすれ違う

二十年前
いっしょに人参を食べさせにいったグロリア
リードをつけて散歩したヘンリー
父や母や

白髪の恩師が

薮から

ひよいと出てくる

もちろん両手を

しっかりと握りしめる前に

彼らは下生えの中に

すつと

消えていってしまうのだが

きつと

時の風車が

誤作動を起こし

いろいろな時代の

いろいろな人々を

呼び込んでしまったのだろう

風も

景色に見とれて

逆戻りしたのだろう

通りに

また次の風が吹いてくる

時の風車は回り
速度を増していく

純嶺
すみれ

野澤里聡

月夜の明けた朝方
心躍るようにお化粧をする
見渡せば甘酸っぱい青がある
打たれ強い青のような君をみて
踊るように人生を贈る。

女傑と呼ばれたあなたたちへ

長尾早苗

どうしてわたしたちの国のことばでは
あなたをあなたたちを
表すことばが多くないのか
いまだに考えている

もしわたしが鳥だったなら
飛んでもあなたに会いに行く
けれどあなたに会うことはできない

幼いころに学んだ教科書にはそうあり
何年も歳を重ねてしまった
荒波にもまれて わたしたちは あなたたちは
少女に戻れないことを知っている
純真さを捨てたのはいつだっただろう
爛漫と花束を捨てたのも

あなたたちにも心があり涙がある

そしてあなたたちにも地獄がある

一人一人を慰められないけれど

あなたたちはあなたたち自身を幸せにする

遠い道

鈴木順三

人生を、公園を、地下道を、月日の流れにのって、抜けていく遠い道。

私が思い出そうとしている森の中で、苦しんだ人の顔の中で、いつもめざめることができない。

知らなかった。

くちびるにもて遊んだ野のバラがこころの中でひらひらと散ってしまったことを。

東京の街で、図書館のテーブルで、ビアホールの片隅で、過ぎゆく人をながめながら想いは夢の奥に続く遠い道。



Om Jambhavantham
 Namah Shivaya
 "Om Jambhavantham, Namah Shivaya"

蜜柑

伊東友乃

このやわらかい しなびるてまえの
蜜柑の皮よ

きょういちにち 疲れはてた
騒音にまみれまくった この時間ぶんを
なんと やさしく 指のはらから

なぐさめてくれるのだ
生きる というなかで

どうしても 背負ってしまう

底にはいつてゆく 足の深みを

ただ オレンジ色の丸としての果実として

まっとうしている きみは

ほんのひととき わたしを

止めるがごとく 手のなかで 存在してくれて

さらには そんなに やさしい皮を

無垢な背を向け 剥かせてくれて ペリリ

わたしは これから きみを食べるといふのに ペリリ

聞こえるよ

きみのいのちの際の音
なかにたくさんの粒たちが 息づいている
なのに
わたしの くちのなかで ひととき
濃い酸っぱさが ひろがれば
きみは それから
きょういちにちぶんの 甘み

ミントガム

伊東友乃

みどり色のミントガムを口にふくめば
意識がいつきに宇宙へいくのだから
今日のわたしはおもしろい
噛むたびにひろがる冷たさに
星くずは唾液といっしょに流れこむ
きつと身体のまんなかには
きらめく筋
せめて天井までと立ちあがる
足裏はいつだって微細な感覚のよせあつめ
宇宙となんもちがわないでないの
ここにも星々があるという点で
じつは踏みつづけているという点で
ひかりは上にも下にもつぶれて
かがやく水面が すみずみまで
わたしの背中をこえて反射する

干し柿とわたし

伊東友乃

わたしはとても孤独なんだろう
干し柿を食べていた
立ちながら食べていて
ちよつと傾いて食べていた
干し柿は口のなかでねつとり
甘さもやはり茶色いろ
で ちよつとずつ齧っていたら
いつのまにか
湖のない湖畔で
わたしは傾いたままだった
霧けむるなかで
わたしはひとり
しろいまま
干し柿をくわえていた
わたしはそんなわたしを見て
こちらもひとりで
止まっていた

ざらついた掌

関根全宏

あのひとのことばは
あのひとの音にすぎなかった
それが何を意味するとも
ふかく問わなかった
ふるえることもなく
ひとつひとつ
流れ
死に
消えていった
掌にのこされた
もうひとつの掌の感覚と
ことばの残滓よ
わたしはいま
そのざらつきを
この指でなぞる
かわいた灰の音に

不意にいまさらながら
その意味がたちのぼる

慎重すぎる

高宮菜那

なんでもかんでも慎重すぎる
頭でぐるぐる回り続ける言葉も
胸が苦しくて息ができない重さも
腰が悲鳴を上げて
一歩前に踏み出せない

表情を変えずに
どんどん前に進んでいく
あの人みたいになれない
わたしは何がしたかった
わたしは何になりたかった
わたしは何が喜びだった

落とし穴なんてないのに
いつからだろう
私はずっと昔のわたしを怖がっている

今日のわたしは明日にはいなくなるのに

怖いけどひとりになりたい

思い切りやってみたい

わたしのために

私が動かないと

怖いもの知らずで

やりたいことに向かう

あの人みたいにはなれない

これからはたくさん頭で考えて

心いっぱい私に私の気持ちを受け止めて

身体に通る抜ける風を覚えて

素敵な言葉を自分の口で伝えていくんだ

案外私は、慎重すぎるわたしも好き

若草よ、笑え

茂木紗希

十人十色というけれど
些細な違いに心が沈む
世界がどれほど広いかも知らずに
されど空の青さを知る
若草は陽の光を浴び
天に向かって笑う

鳥籠のお嬢様

永松佑香

自由になれる

羽はあるはずなのに

飛び方を忘れてしまったの

美しく飾られた檻の中

ここでも生きていられるのに

外の世界を知らない

名を呼ばれるたび

微笑むことだけを覚えて

ここで生きてきた

周りの人は皆口にする

「幸せそうね」と

その言葉だけが

静かに羽に降り積もる

再会

あなたが夜空にいるなら
わたしは海になりたい
月の光であなたが映れば
一つになって波に揺れる

山本麻衣

願いと

山本麻衣

尖った先端で
冷たくて固い私を
叩いて 砕いて 削って
心だけを
取り出してください
まわりは知らない
たとえば
朝の冷たい空気に漂うヒアシンスの香り
昼下がりのピアノの調べ
夜の家路を照らす月あかり
そういう優しいものに
生まれ変わるなら
取り出された心は
静かに溶けて
あなたの世界に浸透する

煙草

山本麻衣

雨粒に濡れたあじさいの
紫と

青と白と

どれが一番好き？と訊くと
あなたは青と言った

ターンテーブルの上を回る
ビル・エヴァンスのピアノの音色
喫茶店の窓から雨を眺めている

雨はお日様の光みたい
何かを急かしたりしない
ゆっくりと

あなたは煙を吐いた
遠い目をしている

あなたの世界に入りたい
二口目を吸うときに
目が合うと

あなたは静かにほほ笑んだ

わたしは
ほほ笑んで
返した

はつ恋

山本麻衣

元気がないときに
どうしたの？元気ないじゃん
声をかけるのはやめてください
コカコーラの缶を持って
近くに來たりするのは
どけよ じゃま
そんなとこ つつ立てんじゃねえよ とか
そんなことを言って
どっかへ行って
誰かと楽しそうに ゲラゲラ笑いながら
どんどん遠くに
小さな点になるくらい
とにかくそんな風に
となりに座ってコーラを飲んだり
同じ景色を見たりするのだけは
やめてほしいの 泣きたくなるから

春の殺人鬼

岩間朱寿

通過列車が散った桜を
轢いていく
誰かの青春を
轢いていく

知ってるよ

岩間朱寿

君は私を知っていて
私は君を知っている
救われていた事はきつと知らない

君がいるから
I Love You は
知ってるよ
って訳したい

虚構詩篇2「沈黙の研究」

潮見蓮

1

声が凍てついて 喉に上がらない
そんな日もある

偏西風が 声をさらっていったのか
沈黙とは 声の不在ではない

あなたの方は いつも冬だから
決して 雪も解けないだろう
吐く息と吸う息のあいだに横たわる
永遠の静寂

言葉になるものと
耐えるものとの大きな隔絶
書くことが 呼吸だとすれば
息を詰めるのは 推敲すること

その一息が 生きる者と

思い出の者とを分ける

おれが 息を吐けば

向こうで 誰かが 息を呑む

2

あなたは 沈黙の教師

おれたちに 身振り手振りしたのち

雪原に向かい その中へ消えていった

あの仕草は 誘いだっただろう

沈黙の文法を学びたいと願ひ

おれは 氷雨の季節になると 後を追う

足跡は だが 目印ではない

絶えず おれを招きながら

おれから姿を隠す

3

あなたが ヒイラギになったかどうか

確かめようがないが

おれにとつて あなたは 木霊です

誰かが それを 愛と間違えたけれど

たとえ 木霊が届いても 返事はできない
あの言葉 その言葉が
波のように広がり 消えてゆく

この地の冷たい氷雨は
耐え忍ぶ者に 絶え間なく落ちてくる
誰かを真似て まるで
重力が愛だと信じているようだ

いや おれたちを 試しているだけだ
それとも どこかへ 届くのだろうか
おれたちの方でないのは 確かだが

4

あの道すがら あなたが
塩の家の 塩のガラス窓に
手形を残していったと聞いた

おれは その手形に手を当てた
だが 到底 重ならない
塩があたって 手のひらが痛む

舐めてみようか

だが 舌も 鈍く痛み
味が辛く 刻み込まれる

外では すべての建物が
頭を垂れ

道ゆく人々を見送る

おれは あなたの名を遠くへ囁く
囁けば まるで足跡が
見つかると思じて

5

おれが かじかみながら
軒下に立つと
言葉が 氷雨にぶつかって 弾け散る
砕けた声は
地面に散り散りに落ちる

祈る声

叫ぶ声

すでに消えた声

急いで拾い集めようとしても

冷たく硬く 粉ごなになって
手から血を滲ませる

氷雨 打ちて打たれて 何かが凍る

6

毎朝 おれは 消滅を練習する
可能な限り 身体を小さく折りたたみ
あなたの枝先に止まることを願う

言い換えるなら

これは 沈黙を目指した
ちよつとした体操です

いつか ある朝

もしも世界が先に目覚めたなら
見つけてほしいのは かすかな痕跡

おれの存在した証

白紙の上に 冬の蛾が止まり
鱗粉の滲みを残す

誰も それが

書きかけの手紙だとはわからない

7

地球が落ちる

太陽が落ちる

全てが落ちる

沈黙も 落ちて 形をなすのか

それは 星ぼしの肋骨の下で

ゆっくりと 脈打ち

おれたちが耳を澄ませば

呼吸は 声に戻るか

かつて途切れたすべての音

言い残されたすべての言葉が

呼吸のリズムに乗って

宇宙の声として舞い戻れ

呼吸と吸気と 再び 語り始めよ

終わるためではない

また始めるため と信じて

蝶の教え

—— K・Sさん（享年85歳）へ

渡辺信二

1

老いた女が 密かに 外の庭へ降りて
木陰の光に まぶたを細める

向日葵の巡る時が 陽を追って

彼女に まといつき

次第に 地に長く

影を 伸ばす

彼女は もはや呼べぬ名を

そつと口にし 静寂に 目を凝らす

つがいの蝶が 連れ立って飛び

過ぎし日の気配を描く

あの人は だって お墓じゃない

わたしのそばにいる

彼女が微笑み まぶたを閉じる・・・

建物の方から 人の呼ぶ声が聞こえる

つがいの蝶が まるで

相手の影を 互いに追うように

絡みあい 離れあいながら

どこまでも一緒に 飛び続ける

なのに わたしのつがいの者は

どこに行ったのですか それがわかれば

わたしは たとえ 山の向こうでも

追って行きます

あるいは あなたから 誘って

蝶たちが 行き先を教えてくれるけど

それを辿るのは 繰り返しではない

あなたとの また新しい経験でしょう・・・

遠くの方から 「Sさん、どこですか

お菓子の時間ですよ」と声がする

3

庭先の草が　夕べの風にそよぐ
つがいの蝶が　また　影を重ね
離れては　寄り添いながら
憧れのように　空へ舞いのぼる

夕焼けが退き　残光が次第に消えて
風のうえ　雲のうえも暗く
家に帰る鳥たちが　まばらに　呼び合い
もはや　あなたの声も　聞こえない

あなたの足跡の　残るはずもなく
行く先も　暗くて　もう　わからない
庭の散歩は　ほんとは　禁止だから

でも　つがいの蝶は　どうか　教えて
わたしの飛んで行ける場所は　どこ・・・
懐中電灯が2本　女へ近づいてくる

★詩誌『立彩』のホームページを開設しました。バックナンバーも
閲覧できますので、下記 URL および QR コードよりご覧ください。

<https://www.rissai.com>



2026 年 2 月 1 日から 2026 年 7 月 31 日までに贈られた詩誌等一覧

○詩誌

『コールサック』125 号、126 号。

『孔雀船』108 号。

『橋』175 号、176 号。

『白亜紀』174 号、175 号。

『GATE』39 号。

『万河・Banga』35 号。

『詩人の輪通信』61 号。

○詩集

ひおきとしこ『哀しみにも 生かされて』コールサック社、2026 年。

○その他書籍・作品集・論文・エッセイなど

西谷拓哉『メルヴィルと両義性の詩学——後期小説への測鉛』北鳥山編集室、2026 年。

山本欣子『句集 光をたむ』2026 年。

日本ハーディ協会編『トマス・ハーディを読む——文学の可能性を求めて』音羽書房
鶴見書店、2026 年。



詩誌『立彩』第 30 号（記念号） 2026 年 9 月 20 日発行

頒価 300 円

編集発行 「立彩」

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1

東京家政大学人文学部 関根全宏研究室気付

印刷 株式会社 DTP 出版 TEL 03-5621-4531